

### もう一度、上から

(ヨハネ三・一〜五)

先週の水曜は国際的な「記念日」だった。マーティ(マイケル・J・フォックス)の乗るデロリアン型のタイムマシンが三〇年の時を越えたどり着いたその日である。アメリカ有数の新聞「USAトゥデイ」はパロディを造り、日本ではバイオ燃料で走るデロリアンの走行イベントがあり、FBなどでもこれについてコメントする人が続出だった。こうした「タイムトラベル」ものは人類の永遠の憧れなのだろう、H・G・ウェルズの『タイムマシン』以降、このジャンルは確立し、新しい作品が続々と生み出されている。閑話休題。思うに人が時間旅行に憧れるのは、一つはそれが不可能だからである。特に自分の過去に戻る、人生をもう一度やり直すというのは不可能だからこそ憧れになることだ。しかしイエスは先に読んだ個所で「人はもう一度(或いは上から)、生まれなければ、神の国を見ることはできない(英語・新国際訳)」と語る。これは一体何を意味するのだろうか。以下そのことについて考えたい。

### 一、「もう一度」生まれる

この物語はある夜にニコデモというパリサイ派に属するユダヤ人の指導者がイエスのもとを訪ねてくる場面から始まる。彼は相当の年齢であったが、齢三〇の青年でありながら、ことばにも業にも力ある教師イエスに興味を示し、教えを乞おうと近づいた。このニコデモに対し、イエスは前述の言葉を語ったのだが、日本語聖書では「新しく生まれなければ」とあるところは原文では「もう一度」あるいは「上から」である。だから三節のことばを聴いたニコデモが「人は、老年になつていて、」と答えるのは実に真つ当な答えであった。人生は一回きり。勢いよく飛び去る時と言う矢の向きをだれも変えることはできないのだからニコデモの言葉はそれなりに正しいと言える。ではイエスはここで出た来もしない新しく生まれるということを語ったのだろうか?当然そうではない。「人は新しく生まれ、救われ、天国に入る」というのはイエスの確信であった。しかしその達成は人間の力や知恵、努力によるものでは決してないということを彼は伝えたかったのである。だからこそ福音書記者はここで「もう一度」とも訳せることばを用いたのだろうか。人間が人間の力で「もう一度」やり直すことはどう足掻いても無理なのである。

### 二、「上から」生まれる

ニコデモは老人だから当然今時の中高生よろしく「無理っ」と叫んだわけではないが、二度生まれることは人には無理な事であった。そこでイエスは五節において、先の三節を説明しなおす。そこには「人は、水と御霊によつて生まれなければ、神の国に入ることが出来ません」とある。この「水」と「御霊」には色々な解釈があるが、旧約聖書において水は聖霊のシンボルとして用いられ(参:エゼキエル三六・二六、二七)、きよめと心の転換を指すことから、これは「水、即ち霊によつて生まれなければ、」と考えるのがよいと考えられる。そこで三節に戻ると、確かに御霊や、聖霊と呼ばれるものは「神」であり、「上から」来るものである。また聖書の他の箇所には「また聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません(コリ一・二・三)」とある。こう考えると人がイエスを信じるといふ決心をするということは、上からしか出来ないということが解る。つまり「救い」が実現する瞬間、その心に働いているのは、救われる人の精進でも、はたまた救いに導く信徒や牧師のスキルでもなく、実に神ご自身なのだ。それゆえクリスチャンが体験する「救い」はその劇的な体験の有無を問わず全てが神の奇蹟なのである。

\* \* \*

先月二十七日、T兄と『キリスト教はじめて』という人のための本』を学んでいた時のことである。三位一体の神についての説明が終わった時、おもむろに彼は言った。「先生、解りました」「何がですか」「うーん、信仰と言うのは、ある意味頭で理解しきれるものではないということですね」それを聴いた瞬間、私は彼に聖霊が働いているのを確信した。すぐに本の学びを一時中断し、「四つの法則」に切り替えた。すると彼は自らの罪を悔い改め、イエス・キリストを自らの救い主として信じる決心をしたのである。実は前週の役員会の席上「Tさんは学びを始めたばかりだから、今回の洗礼式は間に合わないでしょう」と言っただけだった。しかし新しいのちの誕生は奇蹟であり、私たちの予想をはるかに超えて働くものだ。神はT兄に仕事を通して牧師と出会わせ、神への探究心と素直さを与えられ、聖霊を注いで彼の心をきよめ、新しく生まれさせて下さったのだ。何と素晴らしいことではないか。十月二十五日、今日はT兄の記念日だ。私たちのベテル(神の家)に加えられるT兄の存在を喜び、祝福を祈ろうではないか。感謝、ハレルヤ!